

# 空転する「R」——安部公房「R62号の発明」論

安尾 太一

## 序

サンフランシスコ講和条約締結間際の一九五一年五月、安部公房は当時所属していた「夜の会」や「世紀の会」で交友のあった勅使河原宏、桂川寛と共に日本共産党に東京都委員会の直属委員として入党する。更に同年、『近代文学』二月号に発表した「壁——Sカルマ氏の犯罪」が第二回芥川賞を受賞するなど、この年は、一九四八年のデビュー以来、「安部公房」という一人の作家の名が世間に広く知れ渡った時期である。

この頃の安部の言説を見ていくと、友人の中笠肇宛に送られた書簡には「<sup>1</sup>ぼくは次第にマルクシズムに接近してゐます。マルクシズムはぼくのアンチテーゼではなく、ぼくの超えるべきものであるやうに思はれます。」という「マルクシズム」への接近が示唆されていたり、芥川賞受賞時の回想においては以下のように述べる。

そのころ、私は、自分の家に居なかった。当時私は、下丸子方面の工場街で、文学サークルの組織に熱中していたのである。(略)

しかし、一般には、私のこの作品(註…「壁——Sカルマ氏の犯罪」と、私が工場街サークル組織に乗り出したこととの関係は、まるでちぐはぐなものに見えたらしい。大衆の意識を、素朴なりアリズムでしか考えられないものにとつては当然のことだつたろうと思う。だが、アヴァンギャルドの方法とは、芸術の革命と革命の芸術とを統一することであり、

「壁」を書くこととサークルの組織をすることは、私の内部ではつきりと論理的に統一されていた。(傍線部引用者、以下同)

このように、当時の安部は政治活動と作家活動を両輪としていたことがわかる。

だが、その後一九五六年、安部はチェコ旅行から帰国して間もなく、『知性』九月、十月号に「東ヨーロッパで考えたこと」、「日

本共産党は世界の孤児だ―続・東ヨーロッパで考えたこと」を書き、その中で日本共産党を「世界の孤児」として糾弾する。以降、安部は共産党批判を続け、一九六一年末に党から除名処分を受けている。

以上、簡略に見てきたが、一九五〇年代の安部公房は日本共産党への入党、そして党批判からの除名処分という運動の中で作品を執筆していたことがわかるだろう。

そのような動きの中で、安部は一九五三年三月、『文学界』に「R62号の発明」を発表する。タイトルにも明記されているR62号とは、アメリカの資本によって仕事を失い、自殺を図ろうとした男が、怪しげな研究所で、所長や「米国本社」派遣のドクトル・ヘンリー石井らによって脳を手術された「ロボット」のことである。

このロボットは「労働者」をあらゆる天然資源の中で最も安価な資源として工業的に合理化するために作られたものである。所長の指令に従順とされていたが、最後にはR62号が開発した「装置」によって、R62号になる前の「彼」を解雇した工場経営者の高水が殺害されるという事態に至る。結局その「発明」は失敗に終わってしまう。

こうした結末部における所長とR62号の意思疎通の失敗や当時の安部が日本共産党にいたという事実も相俟ってか、これまでの同時代評及び先行論において、本作は「資本主義というものは人間性を機械化してしまう」ということに対するプロテスト<sup>(4)</sup>、「復讐譚の形を借りた一種の文明批評」<sup>(5)</sup>として読まれることが多かった。つまり、所長を「資本家」、R62号を「労働者」として対置

し、労働者側の勝利、資本家の自滅という図式が読み込まれてきたのである。

このような図式に対して木村陽子<sup>(6)</sup>は、R62号の「製造者にして真の遠隔操縦者は、所長ではなく「米国本社」であり、所長の位置は「本人の思惑を超えて、言わば発信局と受信局とを繋ぐ中継局に相当するもの」とした上で、

「米国本社」の「驚異的装置」開発の目的の一つには、左傾化したインテリの思想改造があり、「米国本社」はそれを労働運動の高揚に頭を痛める日本の支配層に売り込むと同時に、自らの支配権確立をも視野に入れた、日本における共産勢力の一掃を意図していたと考えられるのではないか。

と述べている。さらに木村は本作を「思想改造」による「奴隷物語の集大成」であると位置づけ、支配者と被支配者の「中間者」であるR62号という中立的な「インテリ」に対する作家本人の批判意識を看取する。

以上、これまでの先行論では本作に社会的なシステム（資本主義）や、「思想」の問題が読み込まれてきたが、安部は作品執筆当時を「悪戦苦闘の時期」<sup>(7)</sup>であったと振り返る。実際、花田清輝は一九五三年六月に「カフカ大兄へ」<sup>(8)</sup>というエッセイの中で次のように書いている。

こちらには大兄の弟子をもってみずから任じていた安部公房という作家もいますが、最近のかれには、ほとんど分析精神

というものがみられません。ブルジョアは悪人で、プロレタリアは善人だという教訓ばかり書いています。大兄とは手をきって、馬琴の弟子にでもなったのかもしれない。

当時の安部の理解者であり、同じ左翼系作家である花田からも批判を受けていることがわかる。この文章が本作発表と同年に書かれていることから、本作が「労働者」と「資本家」の対立という図式で読まれるものであったことは確かだろう。だが、だからといって本作を「教訓談」として素直に読み込んでしまつて良いのだろうか。先にも触れたように、「悪戦苦闘の時期」に安部が何を問題化したかったのか、本稿においてはこれまで社会的なシステム、「思想」の問題を特権的に読み込んできた作品解釈を刷新することで、本作の位置づけを見直し、当時の安部が「悪戦苦闘」していた痕跡をみていきたい。そのことが一九五〇年代における安部の思索を理解する一助となるだろう。

### 一 「物神性」について

一九五〇年代の安部公房を網羅的に論じた日高昭二<sup>9)</sup>は本作について以下のように述べる。

安部のロボットは、チャベックがとらえた機械と人間の対立という、いわゆるモダニズム的な表象・再現にはとどまらない。この対立は、日本の通俗のプロレタリア小説が多く書いてきたように、資本家と労働者という階級的な対立へと変換

されるとともに、対立を通じての和解というトリックへとしばしば移行させてもきた。だが安部のテクストは、そうした偽のトリックにひそむ罫を反転して、ロボットという「装置」そのものが資本と権力の「システム」を横断していくという表象を導いているというべきであろう。それが明確に示されているのは製作会社の所長の「演説」で、彼は人間の労働力の代用としてのロボットを明確に否定し、むしろロボットによる人間の支配という野望を語っていく。そればかりか、このロボットと同じく頭文字に「R」を頂く言葉を次々と集合させて、あらたな権力機構を「発明」しようとする支配のプログラムを提起していたのである。

さらに日高は一九五八年の『新劇』八月号に発表された安部の戯曲「幽霊はここにいる」の「幽霊」について、「幽霊」という名の「商品」は、マルクスの「資本論」第一章第四節に指摘されていた、人間の意志や人格までも規定する「商品の物神性」という修辞と通底していることもいい忘れることはできない」とし、一九五〇年代の安部を位置づけているが、本作について「商品の物神性」を具体的に指摘しているわけではない。

日高の指摘はこれまで本作を二項対立的な図式の中で読んできた先行論に対して新たな視座をもたらしている。まずは日高が具体的に指摘していない、本作に描かれる「物神性」（フェティシズム）について見ていく。

最後に指令箱の命令でR62号君自身の報告があった。単純な

明るい表情で、ばくの発明したこの機械は、Rクラブの綱領をそのまま具体化したものです。(略)むしろ一番コストの安い人間をどう利用するかということ、そこに問題があるのです。だからぼくは、人間にそのような能力を機械の方から強制し、しかもふんだんに人間をつかうような機械、というところに焦点をあて、このような人間合理化の機械を完成したのです。(傍点原文)

これは作品結末部においてR62号が作成した「人間合理化の機械」に関する説明部分である。「人間合理化」とは、所長の言を借りれば人間を「機械のよきしもべ」とすることである。

所長がこのような「人間合理化の機械」を「発明」しようとした目的の一つは以下の発言にある。

つまり、ロボットと生産と直結させるころみの第一歩として、ある経営不振の製作所にこのR62号を貸与し、その間自由に仕事をさせるという条件で金融面を保証してやる……御心配なく、融資はこのロボットに対して行われるんだから工場はうんと縮小してやりやいい……ありがとう、で、その融資のことはたしかなんですか？……つて言うと？……バカしいはいはよしましょう。利益の折半ですよ……

右の二か所の引用にあるように、所長はR62号という「商品」によって、クラブの会員、経営者である高水、開発者である自身という、いずれも権力の側に位置する三者に「利益」が行き渡る

システムを生み出そうとしていたのである。

ここで「物神性」について確認しておく。マルクスは『資本論』第一巻の第一篇第一章第四節、「商品のフェティッシュ的性格とその秘密」<sup>⑩</sup>の中で

人間の頭脳の産物は、それ自身の生命を与えられて、相互に関係し、また人間とも関係する自立的な姿をそなえているかのように見える。商品世界では人間の手の産物がそれと同じふるまいをする。私はこれをフェティシズムと名づける。フェティシズムは、労働生産物が商品として生産されるとたちまち生産物に貼りつき、したがって商品生産から分離できなくなる。

と述べている。本作においては、所長が創り出そうとしたシステムはR62号という「商品」によって人間を「機械のしもべ」とするものである。こうした支配構造から「物神性」を読み取ることが可能となる。

また、「物神性」はR62号と所長たちの関係性だけに留まらないう。まだR62号になる前の「彼」と研究所に頼まれて自殺志願者を探す学生とのやり取りにも描かれている。

「すみません」学生はあわてて手帳をくり、きちんとたたんだ千円札を、まるでその千円札が独りでに動きだしたかのような手つきで、差出した。受取りながらも、おれは自分の行動を半分しか意識していないと思った。千円札と彼の手は、

はじめから見えないゴムで結びつけられていたような具合だった。

この場面では「彼」と学生の行動を規制するものとして「千円札」が描かれている。「千円札」はそれ自体が「独りでに動き」、「学生」を支配する。「はじめから見えないゴムで結びつけられていた」と感じる「彼」も「千円札」に操られている。つまり、この場面では「千円札」が主体となっている。「彼」は「自分の行動を半分しか意識」できていないのだ。ここにも「千円札」という「貨幣」が人間を支配するという「物神性」の構図が見受けられるのである。

だが、作品結末部、皆が工場から逃げ出した後、最後に残った所長とR62号が対峙する場面で、「残ったのは、R62号君もまた死人であるとすれば、所長一人だということになる」と語られる。これまで「商品」として「融資」の対象にもなっていたR62号は最後の場面において死「人」として描写されるのである。最後に死「人」として語られるということは、R62号を被支配の側に位置づけることになると共に、「生きている死人」であるという「価値」がはく奪されていることになる。ここで今まで支配的だった「物神性」による支配が転倒されていると考えることはできないだろうか。そのことを考えるきっかけとして、安部のエッセイ<sup>①</sup>に重要な記載がある。

言語と云うものは、パブロフによれば、大脳皮質第二系反射で、この機能を持つものは人間だけであり、これは、ただ一組

の反射が条件によって組合わさった条件反射が、更に組合わさって、一次元複雑になったものである。人間の発想と思考がそこで作られ、言語と云う機能となり、その機能は、意識の発生と不可分である。従って、言語は、意識の道具としてではなく、意識の内容そのものとして発生した。道具の使用と並行して、言語の発生は、社会の発生を促進した。言語による意識の発生が、社会活動の連帯意識を生じさせた。ポアンカレ<sup>②</sup>が、「なぜ、人間は空間を三次元として意識するか」の問に答えて、人間が、自己を防禦するに当って、筋肉の運動によって、三方の動きを仮設した場合、最も、それが、適合していたからである」と云ったように、言語の発生を、これとのアナロジー（類推）と考えることができるので、人間の生理的な条件が、言語の社会機能を定めるモメントになる。言語、すなわち意識の条件は、人間の社会内における条件によって決定される。

ここで安部は「言語」は「意識の内容」そのものであるとしたうえで、「筋肉の運動」（「生理的条件」）は「言語の社会機能を定めるモメントになる」と指摘している。また、「言語」は「条件反射」によって作られるとも述べている。つまり、安部にとつての「言語」は、社会的なシステム及び「肉体」の「条件反射」と相互に関連し合い、切り離すことができないものである。

そうした安部の考えを示唆しているのか、作中の所長の演説の中に興味深い記述がある。

労働者は機械の血液であり、技術者はそのホルモンであり、さ

らにわれら選民はその心臓と魂である。(拍手) いかにもその魂が高貴であっても、もし血液が病毒におかされたとしますなら、機械の健康がそこなわれるのは当然であり、それはとりもなおさず文明の危機といふべきでありましょう。

この発言では社会全体が「肉体」の比喩になっている。先述のとおり、これまでの先行論では「資本主義」等の社会的システムや「思想」の問題に対する考察がなされてきたが、そうした「社会機能」について言及する上で、安部のいう「条件反射」の問題は看過すべきではないだろう。つまり、社会的なシステムの問題を本作から読み取るには、「肉体」の「条件反射」と切り離して考えることはできないのである。

そもそも所長たちの「発明」は「肉体」と「言語」を切り離し、システムティックに人間の「意識」を支配しようとした所に失敗があると考ええる。

よって、以降はこれまでに触れられてこなかった「肉体」の「条件反射」と「言語」の問題に焦点化し、「発明」の失敗を詳しく見ていくことで、本作には「思想がない」と酷評され、安部自身も「悪戦苦闘」に陥った理由を考察したい。

## 二 「肉体」の「条件反射」

まず、本作においてどのような「ロボット」が「発明」されようとしたのか、所長の言説を追っていく。

機械はもはやその工学的能力で人間をこえるのみならず、自ら思考し、選択し、記憶する能力さえもっている。では、ここにおいて、人間の存在理由は消滅したのであるか？ いな人間なしに存在することはありえない。しからは、かかる事情の中で、人間がはたすべき役割とはいったいかなるものであるのか？ いわく、機械のよきしもべとなることである。かの自動車王フォードが、その発明「流れ作業」で示したごとく、おくれた人間をいかに合理化して機械に追いつかせるかという点に今日の課題があるのであり(略)

所長の目指した「ロボット」とは、「機械の血液成分」である「労働者」を「ロボット」化し、「流れ作業」のシステムの中へ組み込むものである。また、この「ロボット」は「のろまな人間から限界を超えた能力」が引き出され、所長の送る「信号」に対して「完全な条件反射」を備えていなければならない。

所長たちはR62号の「意識」を支配し、「流れ作業」の中の一部の「ロボット」にするために、「言語」と結びつく「筋肉の運動」といった「下位結合」を「脳」から断ち切る手術を施す。それによってR62号は「言語」を奪われ、所長の発信する「信号」に対して「何故／何のために」という問いかけを持ち得ない、いわばベルトコンベアから流れてくる目の前の作業に対して「条件反射」的に動くような「ロボット」と化するのである。

手術では「言語」を司る「脳」と「下位結合」(「筋肉の運動」)を断ち切り、「信号」に対して「条件反射」的に動く「ロボット」を作る試みがなされる。

しかし、「下位結合」である「肉体」にも「条件反射」は起こり得るはずである。そのように考えていくと、「意識」をコントロールしたシステマティックな支配から「肉体」の「条件反射」が逸脱するものとして表出してくる。それを端的に表しているのは、「若い女」、花井とのやり取りである。

たしかに、日に三度は、花井が食事をはこんできて、何か本当のお喋りをしていった。もつとも、それも、ただそう思っただけのことかもしれない。というのは、彼女が出ていくと同時に、何を話したのかすっかり忘れてしまうのがつねだったから。そのくせ、彼女の心の隅々まで分るような気がしていた。ある日、花井が彼を愛しているのだと確信したことさえある。花井がああ耳輪事件の傷あとを指でつまんで、膜のようなまぶたを半びらきに彼を見つめたときのことだ。彼は花井を抱かなければならないと思つた。立上つて腕をさしおべようとしたり。すると頭の中でふいに草笛がなり、彼の中で誰かが笑つた。

R 62号となつた「彼」は花井と「本当のお喋り」をしたことすら忘れてしまう。一方で手術前に「彼」がつけた「耳輪事件の傷あと」という身体的な特徴については記憶している。R 62号はそれを「見つめる」ことによつて、彼女を「抱かなければならない」と判断する。花井の「耳」を「見つめる」ことによつて「抱かなければならない」と感じるR 62号の言い回しの中には、「おしゃべり」ではなく、「肉体」的な痕跡によつて性欲が「条件反射」

的に喚起されている。

草井も花井のことを「死人と寝た女」と把握していることから、この反応は、以前、同じように花井を抱こうとした「58号」という若いロボットと同様のものであることがわかる。こうしたR 62号の「肉体」的なふるまいは、所長が考えるシステマティックな支配からは逸脱したものである。所長は「おくれた人間」を作り出すという発想、すなわち、「労働者」の「ロボット」化によつて「合理化」のシステムを作りだそうとするが、そのシステムでは制御できないものとして「肉体」の「条件反射」が表れるのである。

こうした「条件反射」が起こつてしまうのは、手術が「脳」のみを対象としたものであり、「言語の記憶」と結びつく「下位結合」（筋肉の運動）、つまり「肉体」にも改造手術を施さなかつたことに起因している。故に「信号」に対するものとは異なる「肉体」の「条件反射」が起こるのである。

さらに、性欲の問題については、R 62号ばかりでなく「国際Rクラブ」の「第一回大会」の雰囲気にも見受けられる。

——そんな中につ、ロマンス・クラブちゆうようなもんを入れてくれんもんかのお。(略)

しかしむろん、ロマンス・クラブも結構なのであります。実をいうと、私自身、類似的提案をしようと思つておつた。とくに外部に対してクラブの機密を守るため、カムフラージュの目的をもつて、またわれわれといえども時には英気を養わんとはいけませんからな、そうしたごくやわらかいクラブをも

うけることは、絶対必要なのである（拍手）（略）  
あるいは婦人と一夜をとにもするローズ・クラブのR……本  
日の会も後半はさつそく、その名もかぐわしきローズ・クラ  
ブに切りかえる予定ではありませんが……（割れるような拍  
手）

「国際Rクラブ」の「R」について、所長は「複雑多様、深遠なる意味」、「日本支配の象徴」を説いている。そして会の後に、本来は「カムフラージュ」の目的を持った「ローズ・クラブ」に切り替わるといふ発言に対して、「割れるような拍手」が起こる。その後、「ローズの方はまだかねえ」という「眩き」が発せられたり、「レジュヴイネーション、すなわち回春」と呼ばれる「ホルモンをだす南洋の珍植物ワンドの果汁」が配合されたカクテルが運ばれるなど、会場の関心は専ら性欲の充足に関わることはかりであり、所長の「思想」に耳を傾けるものはいない。所長の考える日本支配の「思想」から逸脱した性的なものに対して会場から「拍手」や「眩き」が発せられることによって、「第一回大会」の会場は性的な欲望を充たそうとする男たちの卑猥な空気に包まれていく。

こうして「国際Rクラブ」における所長の「日本支配」の演説は、「ロマンズ」や「回春」といった性的な欲望をむき出しにした野次にかき消されていく。所長もついには「いま御賛成ねがった件、さつそくサインねがいたいのですが……サイン？……すぐローズ・クラブに切かえますので……」と、会場全体の醸し出す雰囲気飲まれ、「ローズ・クラブ」への切り替えを迫られる。

このような結果は、恐らく彼の意図するところではなかったに違いない。

所長の考えるシステムから逸脱するものは性的なものだけではない。それは労働者たちの「赤旗とプラカードの行進」や「ストライキ」などの「労働運動」にもいえる。

先に引用したように、所長は社会を機械の身体として捉え、労働者は「血液」、技術者は「ホルモン」、「われら選民」を「心臓と魂」であるとす。 「経営者」たちの支配に対する「労働運動」は所長にしてみれば「機械の健康がそこなわれ」る「病毒」、つまり抑圧に対する「肉体」的な反応であり、制御できないものとして所長の頭を悩ませるのである。

このように、本作では、一貫して「肉体」の動き、「条件反射」が、所長の考える支配のシステムを解体する契機を垣間見せる。所長たちはシステムによって「意識」を支配しようと試みるのだが、人間の「意識」は社会的な規定と、「肉体」的な規定の相互関係によって立ち表れるのであり、社会的なシステムだけでは人間を完全に支配することはできないと言えよう。先に引用した安部の言説にもあるように、「意識の内容」そのものである「言語」と「筋肉の運動」は密接に関連しており、不可分であった。所長はそれらを切り離してしまったために、手術は失敗するのである。

### 三―解体される「言語」

秘書をよび、ペンと用箋を渡して、サインしていただきなさい。受け取ってみると、ただの白紙なのである。R 62号君は、



これではたまらぬと思ひ、なんのサインでしようか？ すると草井はなにくわぬ顔で、分りません、ただそういう規則になつて居るのです。要するに君が当方に死体をゆずりわたすことを承認したというしるしでしょう。

R 62号は手術の前に「白紙」の契約書にサインを交わしているのだが、この契約書にサインをするということは、「承認」するという意味を示すとともに、「自ら不知を要求」したことになるという。つまり、サインを交わした時点で、R 62号はその契約内容について後から抗議することができないということである。当然、それは「彼」の「言語」的な主体が篡奪されることを意味する。

こうした主体の問題については「国際Rクラブ」の会員たちのありようとも関わっている。彼らは所長の演説に対して「拍手」で賛意を示している。他にも彼等は「眩き」といった発話者の見えない意思表明を続けていく。この聴衆の中で具体的に特定できるのは「銀行の頭取」と「あざらしのようなひげ」を生やした「閣下」のみで、どちらも所長の「思想」について何か発言をしたというわけではない。「国際Rクラブ」の「思想」が語られる時、彼等は主張をせず、「眩き」や「拍手」によってしか意思を表明しないのである。

また、演説中に示される「国際Rクラブ」の「R」の意味については「ルール」や「レイン」、「再軍備のためのレミタリゼーション」などといった実に様々なものが付与されていくが、実際に作中では一つも具体的に機能していない。この「R」という容

れ物の中に次々と言葉が投げ込まれていくのである。この動きによって「R」という言葉の意味は希薄化していく。こうしたありようは、R 62号と久しぶりに会つた草井の言葉にも見られる。

「どう、元気にやっていたかい？ へ、いいツノじゃないか、お似合いだぜ。キリン兎の相つてやつだな」(略)「おかしとおもつてたら、やつぱりそうなんだな。小人閑居して不善をなすつてやつだろう……」(略)「おい、知らぬ仏よりなじみの鬼だ、なんとか言つたらどんなもんだい」(略)

「ちえつ、このくたばりぞこないが！ まだ言つてやがる。私ヤ子供のころから、心に笠をきて暮せつて、教えられてきたもんだ。こんな凶々しい野郎を見たのははじめてだよ。ツノをためて牛を殺すようなことになつちやまずいし、それに死馬にハリをさすつてたと、えもあるからな、まあそつとしいてやるが、おぼえとけ、死人とねた女に鼻毛をぬかれるおれじゃないんだ……」

「下位結合」と「言語の記憶」を断ち切られ、「言語」的な主体を篡奪されたR 62号に対して何かを問ひかけることには何の意味もない。草井の詰問に対してR 62号はただ「微笑」で反応している。

そして、自分が認識したものを「キリン兎の相」、「小人閑居して不善をなす」、「知らぬ仏よりなじみの鬼」といった慣用的な表現在置き換える草井の態度は、「R」の意味が常に別の意味へと

移行していく状態と重なっている。つまり、慣用的な表現を用いる草井の認識は、それを使えば使うほどずれていく。本作においてこのような言葉は常に何かを正確につかむことなく、機能不全の状態となり、上滑りしていくのである。

「私はまずわがロボットの歴史的・社会的意義からお話しするつもりである。ごらんとおり……とR62号君を顎でさし、なんだ、62号、帽子をとらんか！ 金切声で叫び、ウ、ウ、と声帯でないところで息をととのえてから、……（略）

ウ……とさんざんむしられて骨だけになった皿の中の鶏を凝視しながら、まず、労働の歴史から考えていただく。（略）

本作の語り手は、登場人物の台詞を「……」でつないだり、R62号を「彼」や「おれ」として語ったりするなど、不規則なものである。そうした不規則な語りは右の所長の長台詞の中にも見られる。

右の台詞の中で「……」を使って明らかに地の文だと思われる言葉が挿入されていたり、「同感の囁き、所長はいくらか気をよくして」、「（拍手）」など、聴衆の「囁き」や「拍手」が混じり合っているのである。

「思想問題以外には興味がない」所長だけが演説の場でその「思想」を表明しているのだが、このように地の文との混合や、「囁き」、「拍手」といった聴衆の中で発話者／発信者の特定できない意思表示によって彼の言葉は混線していく。

さらにこうした混線は所長自身の「声帯でないところで息をと

とのえ」る仕草が台詞の中に表れていることから読み取れるだろう。

この長台詞の直後に、会員たちが泥酔し、誰も所長の演説に耳を傾けていないことが判明するが、この場面から七カ月経つまで、所長の台詞に鍵括弧は付されず、地の文の中で「……」によってつながれていく。

そして作品結末部の「十一月のある晴れた午後」にR62号が製作した「新式工作機械」の試運転の際、所長は「今日の意義」と題する講演を行うのだが、その講演に関する所長自身の台詞はななく、「この日をクラブの記念日としたいという提案がなされた」とまとめられている。さらに「国際Rクラブ」にとつて重要な「綱領」も、自ら説明することはなく、あえてR62号に「しゃべらせ」ている。先に指摘した所長の長台詞以降、彼の言葉が徐々に後景化していくのである。

「Rクラブの綱領」をそのまま具体化した、いわば所長の「思想」の結晶たる「人間合理化の機械」は、結果的に高水を殺害する。所長は「流れ作業」の中へ人間を組み込むことを意図していたのであるから、「死体」を生み出す「装置」を開発してしまつたR62号には所長の「思想」が正しくインプットされていないということになるだろう。その理由はドクトル・ヘンリー石井が手術の際に「言語の記憶」と結びつく「筋肉の運動」（下位中枢）を断ち切ったからである。所長が「ツノ」に送つた「信号」は「言語」として正しく受信されていないのだ。先にも確認したように、「思想は科学」だと述べた石井の「科学」は「言語」と「肉体」を切り離してしまったことにより、失敗するのである。

そして、その失敗は同時に所長の「思想」の失敗でもある。これまで「思想」を語ってきた所長の発する「言語」はこうした失敗により、意味が空転していく「言語」へと解体されてしまうのである。

## 結論

「何をつくる機械だったんだ？」同時に自分にもためすようにそっと聞いてみる。R 62号君はほんやり首をかしげ、そのままどこか見えないところを見る目つきで、かすかに笑った。所長の顔は次第に恐怖にゆがんできた。「何をつくるつもりだったんだ！」ありったけの声で叫んだが、もうその声はま近にせまったもみあう怒声にかきけされ、R 62号君には蒼くひきつった顔と大きくけいれんする唇が見えただけだった。

この作品のラストシーンにおける、「何をつくるつもりだったんだ」という問いかけは、R 62号には決して届くことはない。さらに所長の叫びは「労働者」たちが「もみあう怒声」によってかき消されてしまう。

また、作品の最後に描かれたのがR 62号の視点から見た所長の「けいれんする唇」であったことにも着目する必要がある。それは、これまで雄弁に「思想」を語ってきた所長の「言語」がただの「筋肉の運動」として表出していることを示している。そもそも「言語」と「肉体」を切り離すことによって、R 62号の「言語」的主体を篡奪し、問いかけを無効化するようにインプットしたの

は所長である。この場面では、その所長自らが「思想」を語る主体として存在することができなくなっているのである。

こうした「肉体」と「言語」の影響関係は、マルクスの言う「物神性」と相似形をなしている。「商品」から「物神性」を切り離すことは原理的に不可能であり、同じく「肉体」と「言語」は切り離すことができない。切り離してしまえば、R 62号が作った「装置」のように、ただ死体を産出するだけのものとなってしまふ。つまり、こうしたシステムを作り出してしまふR 62号は「商品」としては成立しないのである。

それは同時に、所長の「発明」そのものが失敗であったという事実を突きつける。主体を篡奪し、問いかけに対して応答しないように手術をした張本人である所長は、ここで自らが「発明」したR 62号に対して問いかけをしている。それは矛盾以外の何ものでもない。

こうして本作は、自らの「思想」の決定的な破綻を目の当たりにした所長の「肉体」の「条件反射」を具象化した「けいれんする唇」をクローズアップすることによって幕を降ろす。言葉は無意味になり、単なる「肉体」の動きとして認識される。

既に見てきたように、本作は「思想がない」作品と酷評され、その後の研究においても「資本主義」や「思想」といった側面のみが読み込まれてきた。だが、安部の主眼はそれだけでなく、「肉体」的な「条件反射」といった「物質の自律性」<sup>13</sup>にもあったといえる。

「肉体」の「条件反射」が観念的なシステムから逸脱するものとして描かれているのは安部の「悪戦苦闘」の結果である。この

痕跡を看守することで、当時の安部の問題意識の一端が明らかとなるだろう。

## 注

- (1) 一九五〇年四月二〇日「中壘肇宛書簡 第十七信」(安部公房全集「第二卷、新潮社」より)
- (2) 安部公房「あの朝の記憶」(一九五九年『文学界』三月号)
- (3) この間のことを安部は「東欧を行くーハンガリア問題の背景」(一九五七年二月、大日本雄弁会講談社)に記している。旅行の行程については鳥羽耕史(『運動体・安部公房』二〇〇七年五月、一葉社)が「一九五六年四月二日から二十九日にかけて開かれたチエコスロヴァキア作家大会に、安部公房が新日本文学会および国民文学会議の代表として出席するため東京を発つたのは同月二十四日のことであった。ローマ、パリ経由で会場のプラグに着いたのは二十八日、会期も残り二日の時点だった。彼は会議の翌三〇日から五月三日までは他の外国代表と一緒に、四日から一〇日までは単独でスロヴァキアを旅行し、一〇日プラグに戻る。そして三週間プラグに滞在した後、ルーマニアのブカレストとコンスタンツァ、そしてパリをまわって六月二四日に帰国した」と纏めている。(第一章「国境をめぐる思考ー『東欧を行く』一九五六」より)
- (4) 「七十一回 創作合評」(「座を失った女」「流人島にて」「黒い富士」「R62号の発明」「鷹」(一九五三年「群像」四月号) ※参加者は木下順二、椎名麟三、手塚富雄。引用は椎名の発言。
- (5) 有田忠郎「寓話、そのパロディと詩と擬論理の世界ー安部公房小論」(一九六七年『ユリイカ 詩と批評』三月号) 荻正は有田の論を受け、「安部公房『R62号の発明』論ー実用性につ

いてー」(二〇〇二年『熊本大学文学部国語国文学会』第三七号)において、「生産を合理化するはずの機械が、合理化を追求した結果なにも生産しなくなり、労働をただの運動に変えてしまったのである。そこに行き過ぎた合理化によって労働と労働者を顧みなくなった資本主義社会に対する批判がある」と述べており、有田の言う「文明批評」を「資本主義社会に対する批判」として具体化している。

また、ゴーシュ・ダステイター・デバリシタは「安部公房に とつてのロボット文学ー短編小説「R62号の発明」をめぐってー」(二〇〇四年三月『筑波大学比較・理論文学会 文学研究論集』第二二号)の中で、当時安部が日本共産党に入党していたことを受け、本作に「共産主義の思想の影響」があるとし、「労働者(ロボット)」が「資本家」を殺害するという結末部に「資本主義の終わり、または共産主義・労働主義の勝利」を見ている。

このように、本作における先行論は「資本主義社会」への批判を読み取るものが多い。

- (6) 木村陽子「文学の冷戦と安部公房ー「R62号の発明」試論ー」(二〇〇六年三月『早稲田大学国文学会 国文学研究』第一四八巻)
- (7) 針生一郎との対談「抽象的小説の問題」(一九五七年『新日本文学』五月号) 具体的には「壁」から「闖入者」までの時期の後」に安部の懊悩があったことを述べている。つまり、一九五一年末頃から作品集『R62号の発明』が一九五六年一月に山内書店から刊行されるまでの期間を指すと考えられる。
- (8) 花田清輝「カフカ大兄へ」(一九五三年六月三〇日『北海道新聞』) ※『花田清輝全集』第四巻(一九七七年一月、講談社)より

- (9) 日高昭二「幽霊と珍獣のスペクタクル」安部公房の一九五〇年代」(二〇〇四年『文学』一一・一二月号)
- (10) 今村仁司、三島憲一、鈴木直訳『マルクス・コレクションⅣ』(二〇〇五年一月、筑摩書房)
- (11) 安部公房「僕の小説の方法論」(一九五二年『希望(L'ESPoir)』一月号)
- (12) 前掲註(4)より、手塚の発言
- (13) 前掲註(7)より。安部はこの対談の中で「物質の自律性を支えにして、それで観念的に対抗しなかった。特にこの短編集(注…一九五六年に刊行された『R62号の発明』を指す)で一貫してる気持はメカニズムに関心があったというより……物の持つ自律性ね、合理的な体系に対立するもの、むしろナンセンスなね、こいつを支えにしたかったわけですよ。合理的なものというより、むしろナンセンスなものとして、メカニズムを……。」と述べている。

※本文の引用は「安部公房全集」第三巻による